

## 私の戦記

田川市

伊藤 満勝

昭和18年9月28日、第二補充兵の私は34歳で召集され、西部8062部隊防空隊に入隊、小倉市内の大原陣地で防空兵の教育を2ヶ月受け、そのまま足立山ふもと西南2km地点の『竹下陣地』大領寺中隊に配属され、小倉の空の防人として高射砲班に回された。そして3ヶ月もせぬうちに、炭坑の坑夫であるが故に、今度は陣地構築の作業要員として選抜され、小倉清水町の板櫃(いたびつ)にやられた。

そこは小山の上の小さな陣地、今までいた防空隊が撤去した後私たちが受け継いだのだった。兵舎はその山の頂上に、ぽつんと一舎小さいのがあるだけで、頂上からの眺めは一望のうちに小倉市街はおろか、遠く海が展けて見晴しは良かった。

来た当時は上官もめったに現れず、兵営生活の中隊のときのような固苦しさはなく、私たち作業員13人の天下だった。だが作業は突貫工事で苦しかった。でも作業隊員は兵隊でありながら兵隊でないような、のんびり隊務の中に班長殿と共に汗いっぱい働いた。

戦線が広がり手うすになった兵士を捕うため、朝鮮や台湾出身の人まで駆り出したので、炭鉱も坑夫が足らず、ふたたび婦女子の坑内就労を認めるようになった。私の出所鉱三井田川炭鉱も、女や18歳未満の少年も坑内に働けると言うので、5人の子供を守って生活していた妻からも、「坑内で働いて、子供たちに食べ物を増やしてやりたい」と手紙が来た。

そうだろう！。坑内に働く者のいない家庭と、いる者の家庭とは、あらゆる配給物資に差別があり、食べさかりの子供に、人並の配給を得たいばかりに妻は決心したのだ。出征兵士の家庭になぜそんなに薄情なのか、これでは出征兵士の留守が可愛そうだ。炭鉱主のやり方がなっていない。それを政府は知らぬ顔でいるのか？。「応召家族を差別するな」と私は声を大きくして叫びたかった。

次はそのときの日記や記憶を抜粋したもの…。

敗戦の数日前の白昼、低空から爆弾のように空中爆発で投下されたアメリカ軍のビラに『日本よいとこ花の国、7月8月焼野原』といったような意味の文句や、降伏勧告文、そしてマンガのビラには、ヨロイカブトの武士が、馬に乗って刀をふり上げている頭上から、アメリカの飛行機が襲いかかっており、もう一つのマンガは、断崖の上に建っている一軒家の日本家屋が、激しく傾き今にも断崖からすべり落ちようとしているものだった。

兵隊たちは、陣地から飛び出し、これを拾った地方人の手から取り上げよと命令され、民家の中まで入って寄せ集めた。そのようなビラなどには、もうさして何とも思わなかったが、頻繁な空襲には全くいや気がさしていた。

昭和20年に入って、すでに数次の対空戦を展開したが、その都度爆弾を見舞われどうして、友軍機の満足な活躍はおろか、各陣地から発砲する高射砲の威力のなさにもがっかりした。わずかに、「わし峰」陣地の10cm砲の弾が届くだけでは情けない。ボーイングB29は1万m上空を、高速度で飛ぶのでその航速や航度の差では、てんで他の高射砲では駄目。足立山頂上

の機関砲も然り…。空襲は海上の船舶や、食糧倉庫まで焼き払い、機雷も投下した。思うにこれまでの長期偵察で、地理をのみこんでの挑戦であろう。

とうとう、艦載機までが飛んでくる。制空権を握られてしまったのか。夜間は照明弾を使って来るので、灯火管制も役をしない。私たちの作業も戦局の緊迫から、何はさておいても弾薬や、兵員の退避壕を掘ることの方が急である。

7月は空襲の激しい月だった。

そして明けて8月。その6日に原爆第1号が広島に投下され死者20万人という。この時の情報は正体不明の巨大爆弾ということだけ。3日後の9日には第2弾が長崎に落とされ、15万人の死傷とあった。

8月15日、いつものように私たちは、壕を掘っていた。その小休止のとき、見るともなしに下の通行人を見たとき、私たちはオヤツと思った。大勢の女学生たちが、肩をならべて泣きながら通るのである。いや、女学生ばかりではなかった。通行人の姿が、みんな泣いているように、揺れているのだった。

陣地の作業の兵隊たちは、何も知らないのである。おかしいなあとは思いつつも、作業をしていると、20分ばかりたってから週番上等兵殿が走ってきて、「おい、もう戦争は終わったぞ。日本は無条件降伏だ。すぐ兵舎に戻って飯あげだ」と言う。まだ11時10分だというこの時間に、昼飯の飯あげをすと言って、腹立たしそうに土をけりながら行ってしまった。

そういえば、変だとも思った。あれほど激しかった空襲も、今日は朝から音沙汰がない。昼飯をしていると、あわただしく上等兵が来て、「12時に天皇陛下の重大放送があるから、ばたばた飯を終わって、そのままにして置いて、みんな巻脚絆、帯剣で2号兵舎に集合」とどなった。

天皇の重大放送とはいったい何だろう？。2号兵舎は人いきれが立ちこめるので、むし風呂のように暑苦しかった。整列して待つことしばし、さすがに将校殿も緊張していた。水を打ったような静けさの12時、やがて陛下の玉音が流れた。

耳を疑いたいほど、意外なお言葉だった。「日本の安泰と国民の幸福」を願う大御心は、終戦を宣言された。

そして次の日、軍書や兵典は勿論、手紙の類は日記にいたるまで、軍隊に関係の有るものは全部焼却。まるで軍隊の証拠いんめつである。私物の検査があつて、一つ残らず週番上等兵が取り上げて持って行ってしまった。それでなくても物忘れの早い私の記憶、細かい日時などなおさら不明のものが多いのも仕方がない。

板櫃のあの丘の中腹に、東西150mはあったらう坑道の掘り抜きのトンネル、その中央部に大隊本部の指令所を作ったのだが、あの見事なトンネル陣地も、終戦と共に解体され、跡かたもない。

私は進級を約束されていないながらも、負け戦さの終戦のおかげで、20年9月2日、第3番目の除隊者として炭鉱関係者の一団に混じって、めでたく帰郷することができた。もう戦争はいやだ、あつてはいけない！！。